

2 歳児の母子ごっこ遊び場面における会話の発達的变化

飯 島 典 子

本研究では、2 歳児女児の会話発達について発話間関連性、テーマ関連性の 2 つの特徴から検討を行った。調査は 2 名の母子について縦断的に行われた。ごっこ遊び場面は 2 か月に 1 回 10 分間記録された (対象児 1 名につき前期 3 回、後期 3 回、合計 12 回)。対象児が 2 歳 6 か月までの記録を前期、3 歳までの記録を後期とし比較検討を行った。その結果、関連性発話は母子ともに前期から比較的高い一致率を示し、後期になるとさらに一致率は高くなった。テーマ関連性は母子ともに前期では比較的低い一致率であるが、後期になると上昇し比較的高い一致率となった。このことから、発話間関連性は 2 歳前半からみられるが、テーマ関連性は 2 歳後半になって見られるようになる。また前期の母親のテーマ関連性の低さは、子どものテーマ関連性の低さとの間に関連があることが明らかになった。

キーワード：2 歳児、母子相互交渉、会話、発話間関連性、テーマ関連性

I. 問題と目的

コミュニケーションとは相互理解可能なコードを使って他者とメッセージを交換し合うことである。そして、このメッセージ交換をとおして相互理解を深め、相互の関係を築きあげていく (綿巻, 2001)。このようなコミュニケーションを可能にするコードの一つに言語がある。「言語」という社会的コードは、話者の考えを他者にも理解可能な形で表現されなければならない。このような発話行為 (Austin, 1978) は一語文のころから発揮されている。しかしながら、会話のような言語的コミュニケーションでは、自分の伝えたい内容を言葉に置き換えられるだけでは不十分である。Garvey (1987) は、会話とは話すことを通じて行う一つの出来事全体をさし、エピソードでは主題上の連続性やまとまりをもった、つながりのある交換が続くとしている。これと類似して橋内(1999) は、「まとまりのある言語表現」とは①同じ主題で貫かれていること (統一性unity)、②文と文の間に文法上・語彙上の結びつきがあること (結束性cohesion) の 2 つの特徴があるとしている。これらのことから、会話では先行発話と後続発話に関連性 (発話間関連性) があるだけでなく、主題 (テーマ) に相応しい発話 (テーマ関連性) を連鎖させていくことで、エピソードが整合性のある

会話として成立すると考えられる。

幼児の会話における発話間関連性とテーマ関連性はいつごろから可能となるのだろうか。発話間関連性は比較的早い段階から可能で、質問に対する応答について調べた結果では、2歳頃から質問に対し何らかの適切な応答が可能である (Bloom.et.al., 1976; Garvey, 1977; Shatz, & O'Reilly, 1990)。また、3歳から4歳にかけて、聞き手の反応は話者発話に関連した反応が増加する (深田, 1999)。しかし、このような変化は話者発話が「陳述」の場合に限られている。これらのことから先行発話と後続発話の発話間関連性は質問、要求に対する応答から開始され、次第に陳述に対する応答へと拡張すると思われる。

次にテーマ関連性である。これまでの先行研究では、幼児のテーマの共有について検討は行われているが発話がテーマと整合性があったかどうかという観点から検討はなされていない。しかし、ごっこ遊びではテーマが設定され、それにもとづいてエピソードが展開される。ごっこ遊びにおけるテーマの出現からみると、ごっこ遊びのテーマはごっこ遊び開始初期から設定されているわけではない。ごっこ遊びにテーマのある場合とそうでない場合を検討した高濱 (1993) の結果では、年少中期以降から徐々にテーマが意図的に提示されている。また、エピソードを展開するためには遊びの参加者間でテーマを共有しなければならない。このテーマ共有指向性は年齢と共に高くなる傾向にある (藤崎・無藤, 1985)。これらのことから、年少中期以降からテーマに関連する発話を意図的に発するようになり、年齢発達に伴い共有の試みが成功するようになると思われる。

これまで2歳代母子相互交渉に関する研究では、幼児の言語発達には大人による子どもへの働きかけが重要視されている。例えば、トピックの複雑性では、1トピックの単位の長さ (発話長・ターン数) は、母親が介入した場合では2歳代でも比較的長くなる (冷水, 1980)。また、秦野 (2001) による隣接対の縦断的研究では、母親は後続する適切な隣接対の使用に援助を与えていた。このような母親による言語的援助の意義がさまざまな研究で述べられている。しかしながら、冷水の結果では、母親の援助による発話特徴に発達的变化はみられないが、仲間間の場合では発達に伴い増加し、次第に母親介入の場合と差がみられなくなる。また秦野の母親による隣接対援助は18か月頃から次第に減少し、それに伴い子どもの平均発話長 (MLU) が長くなる。このように発話連鎖が維持されMLUが長くなることは、先行発話に後続発話をより複雑に応答するような子ども自身の言語的発達が存在している。しかしながら、従来の研究では母親の言語的援助に焦点化され、子どもの言語的発達は十分に検討されていない。したがって、複雑化された子どもの応答が整合性のある会話として必要な発話間関連性、テーマ関連性を維持しているかが明らかでない。

そこで、本研究では2歳代の母子相互交渉における発話を縦断的に調査することで、子どもの発話間関連性、テーマ関連性の発達的变化を明らかにすることを目的とする。

ところで、2歳代の積極的な母子相互交渉の主なもの遊び場面にある。ごっこ遊びは比較的早い段階から経験のできる共同遊びである。また、ごっこ遊びでは遊びのイメージを共有する必要があるため、見立てやテーマに関する遊びのプランをお互いに伝え合うことができなければならない。そして、お互いが関連性のある発話を用いることでエピソードが展開される。これらの特徴から、

ごっこ遊びは言語的コミュニケーションの特徴を発揮する場面であると思われる。そこで、本研究では母子相互交渉の中でも、ごっこ遊び場面における相互交渉について検討を行うこととした。

II. 方 法

1. 対象児

大学内プレイルームで開催している育児サークルに参加している2歳児2名。Y; 2歳3か月、M; 2歳0か月 (2003年6月現在)。

2. 調査期間

2003年6月～2004年3月。約2か月に1回10分間の母子遊び場면을録画記録した。Y・Mが2歳6か月までの記録を前期、2歳7か月から3歳までの記録を後期とした。Y・Mともに前期3回、後期3回記録した。

3. 手続き及び記録方法

大学内大プレイルームにおいて月に1回母子遊びグループを開催した。グループの内容はプログラム化されており、①開始のお集まり (10分)、②製作及び自由遊び40分、③終了のお集まり (10分) である。②製作及び自由遊びが開始され15分経過後、母子遊び対象親子は別室の小プレイルームに移動し母子遊びを10分間行う。小プレイルームにはあらかじめごっこ遊びが誘発される材料が準備されており、「このおもちゃを使って10分間二人で遊んでください」と母親に教示する。そして10分経過した時点でスタッフが迎えに行き、大プレイルームに合流する。

記録は、大・小のプレイルームによって挟まれる記録室から、各プレイルーム内に常設されているカメラを操作し録画を行った。

4. 材 料

ごっこ遊びを誘発する玩具として、ままごとセット、人形、ハンカチを用意した。ごっこ遊び以外の共同遊びを考慮しブロックも加えたが、ブロックが単独の遊びにならないように数を調整した。

III. 結果と考察

得られたデータからごっこ遊びにかかわるエピソードを抽出し、発話数、発話間関連性、テーマ関連性を分析したところ対象児間でほとんど差が生じなかったことから今回は合計して集計を行った。

1. エピソード数と発話数

得られたデータからごっこ遊びにかかわるエピソードを抽出した。エピソードは前期が28、後期が25であった。母子の発話数は前期では母親が302、子どもが296、後期では母親が479、子どもが475であった。エピソード数が前期から後期にかけて減少するが、発話数は母子ともに増加していた

(表1, 図1)。これは母子ともに1エピソード内の発話数が増加し、発話連鎖が長くなっていることと関連していると思われる。

また、前期、後期ともに母子の発話数に大きな差は見られない。特に前期の2歳前半期であったとしても、子どもは母親と同じ頻度で発言することができていた。

表1 前期・後期のエピソード数と発話数

	エピソード数	母親	子ども	合計発話数
前期	28	302	296	598
後期	25	479	475	954
合計	53	781	771	1,552

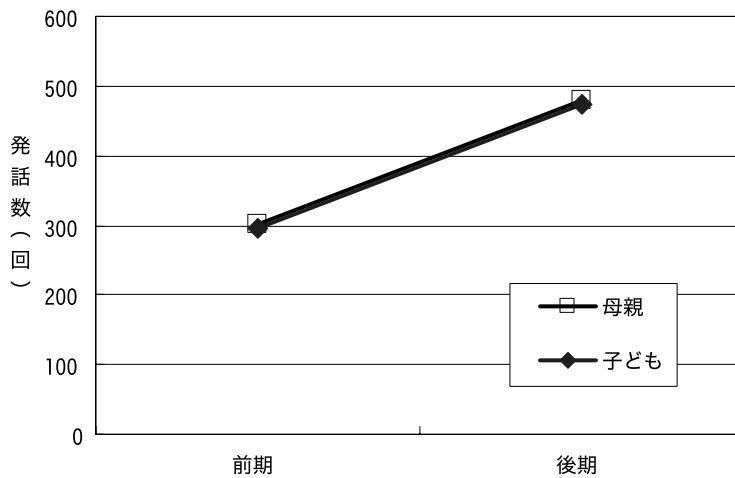


図1 発話数の変化

2. エピソードの開始・終了

全53エピソードについて、エピソードは母子のどちらによって開始と終了がなされたのかについて分析を行った(図2, 3)。開始について、前期では母親が23回(82.1%)、子どもが5回(17.9%)であり、後期では母親が17回(68.0%)、子どもが8回(32.0%)であった。前期、後期ともに母親によるエピソード開始率が高いが、後期に入り子どもの開始率は10%以上増加していた。次に終了は、逸脱が3回以上連続した場合にエピソードの終了とした。また観察時間の終了により途中終了したエピソードは、前期4回、後期6回であった。逸脱によるエピソード終了のみをみると、前期では母親が9回(37.5%)、子どもが15回(62.5%)であり、後期では母親が10回(52.6%)、子どもは9回(47.4%)であった。母親は前期から後期にかけて終了率が高くなるが、子どもは前期から後期にかけて終了率が低くなっている。また、後期の終了率は母子でほとんど差がなくなっている。これらのことから、前期から後期にかけて子どもはエピソードに積極的に参加するようになると思われる。

表2 エピソードの開始と終了

	母親		子ども	
	前期	後期	前期	後期
開始	23	17	5	8
開始率	82.1%	68.0%	17.9%	32.0%
終了	9	10	15	9
終了率	37.5%	52.6%	62.5%	47.4%

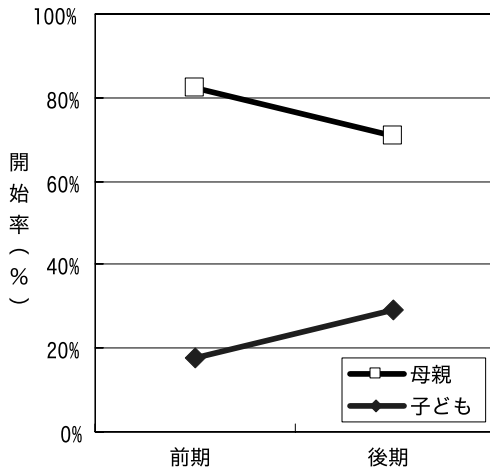


図2 母子のエピソード開始率

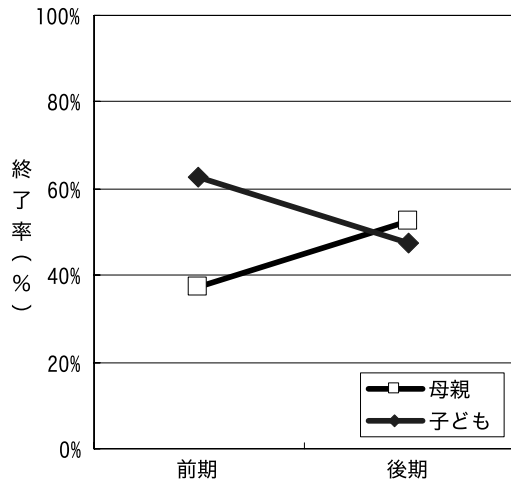


図3 母子のエピソードの終了率

3. エピソードからの逸脱

エピソード中に、ごっこ遊び以外の現実的な会話がなされた場合を逸脱とした。この逸脱がなされた回数と母子それぞれの発話数に対する逸脱回数の頻度について分析を行った(表3、図4)。その結果、母親は前期39回(12.9%)、後期42回(8.8%)であった。子どもは前期63回(21.3%)、後期40回(8.4%)であった。逸脱率は母親が前期、後期ともに1割程度であり、子どもは逸脱率が多い前期であっても2割程度であった。また、母子ともに前期から後期にかけて逸脱率が減少していた。しかし母親の減少率に比べ、子どもの減少率が高かった。さらに、後期に入ると母子ともに逸脱率は8%程度と差がなくなる。これらのことから、前期から母子がエピソードに積極的に参加しているが、後期になるとその傾向は強くなり、エピソード中にごっこ遊びとは無関係な現実的な発言はほとんど生じなくなると思われる。

表 3 エピソードの逸脱

	母親		子ども	
	前期	後期	前期	後期
発話数	302	479	296	475
逸脱回数	39	42	63	40
逸脱率	12.9%	8.8%	21.3%	8.4%

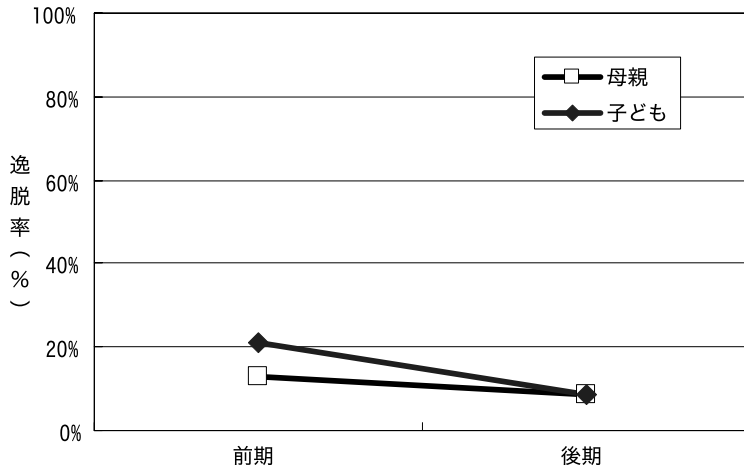


図 4 母子のエピソード逸脱率

4. 発話間関連性・テーマ関連性

母子のそれぞれの発話について、発話間関連性では先行発話との一致がみられるかどうか、テーマ関連性ではエピソードの主題と一致するかどうかについて分析を行った(図5、6)。発話間関連性の一致率は、母親が前期71.5%、後期87.5%であり、子どもが前期70.4%、後期81.5%であった。発話間関連性の一致率は前期、後期とも母子に違いがみられない。また前期から後期にかけて増加する傾向も同じであった。これに対し、テーマ関連性の一致率は母親が前期55.3%、後期73.3%、子どもが前期47.6%、後期75.4%であった。テーマ関連性の一致率は母子ともに前期から後期にかけて増加傾向にあった。母親と子どもの増加を比べると母親が約20%増加に対し、子どもは約30%と母親を上回る増加を示していた。これらのことから、発話間関連性のある発話は2歳前半の子どもでも行うことができている。しかしテーマ関連性のある発話は2歳前半の子どもには十分に行うことができない。2歳後半になってテーマ関連性のある発話も比較的多く行うことができるようになると思われる。また、後期になると発話間関連性とテーマ関連性の2つの特徴を有した発話が多くなることから、子どもは2歳後半から整合性の高い会話ができるようになると思われる。

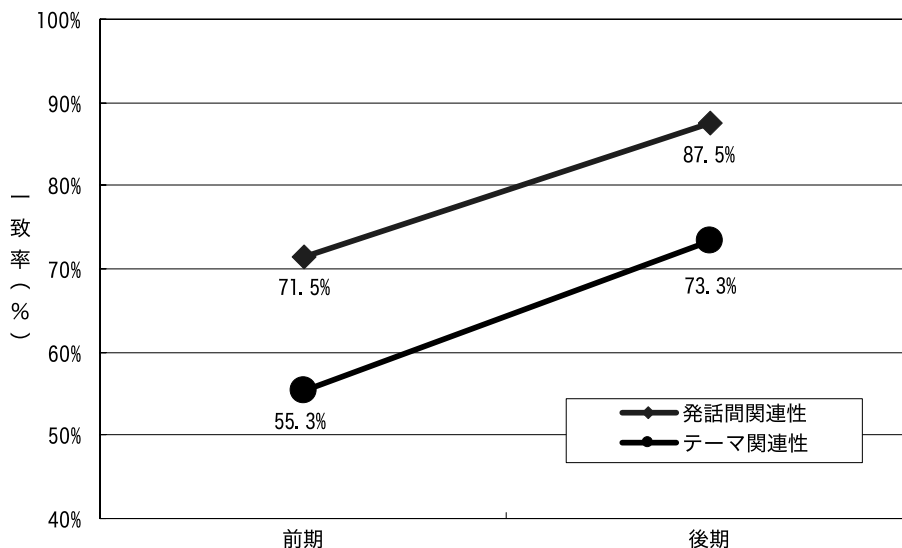


図5 発話間関連性とテーマ関連性の一致率 (母親)

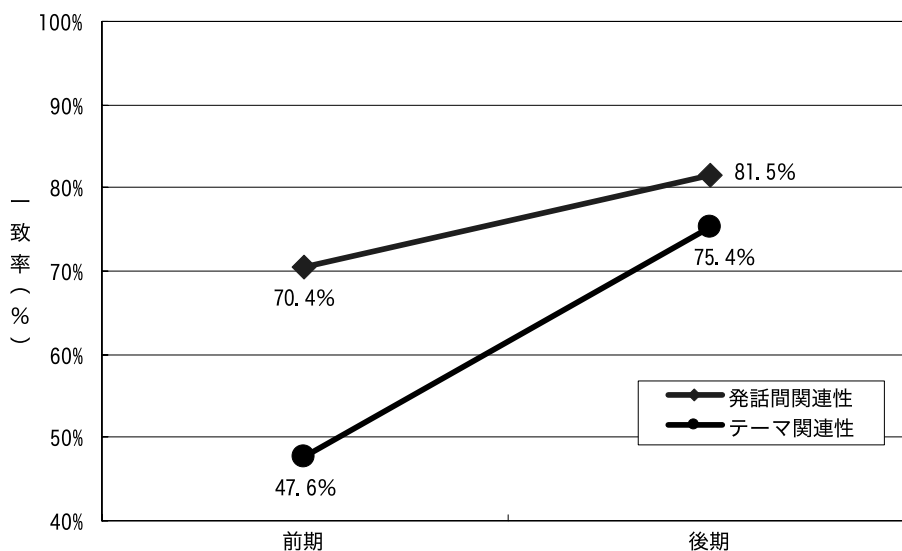


図6 発話間関連性とテーマ関連性の一致率 (子ども)

5. 発話内容の特徴

発話内容を場面が設定されているか否かという点から (表4)、①イメージ言及、②断片的行為、③設定に分類し出現率を求めた (図7, 8)。まず母親の発話内容をみていくと、前期では「イメージ言及」36.5%、「断片的行為」19.2%、「設定」44.3%と、「設定」が最も高い割合であった。後期では「イメージ言及」41.9%、「断片的行為」11.6%、「設定」46.5%と「設定」が最も高い割合であった。母親の発話内容は前期から後期にかけて「イメージ言及」と「設定」が増加し、「断片的行為」

為」が減少している。しかし、いずれにおいても変化率は10%未満と少ない。特に「設定」に大きな変化はみられない。このことから母親は前期から後期にかけてほぼ同じ態度で遊びに参加していると思われる。また、テーマに関連する「設定」が前期、後期ともに高いことから、母親は前期から場面を設定し主題に沿った発話をしていると思われる。

表4 発話内容のカテゴリー

カテゴリー	特徴	例
イメージ言及	発声のみで動作は伴わない	「これはおうちだよ」とイメージを言及するが、場面設定が不明
断片的行為	場面設定が不明時の断片的行為と発話	場面設定が不明確な場面での「ごはんどうぞ」と差し出す、「あむまむ」と食べるなど
設定	場面設定が明確時の発話	家に帰ってごはんを食べるという場面設定がある場面での、「ごはんどうぞ」など

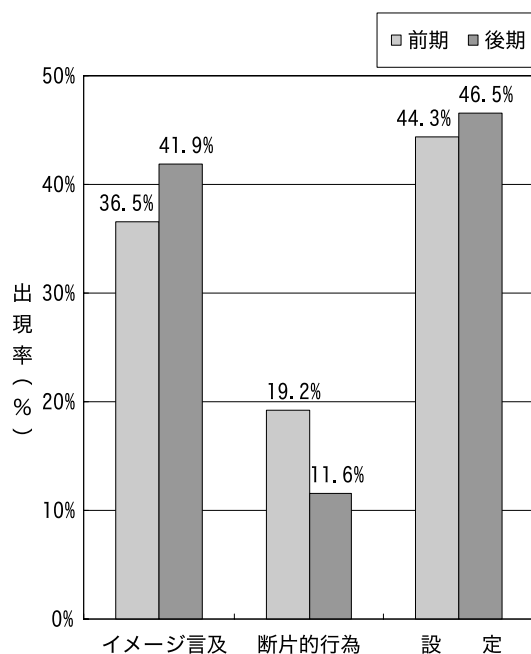


図7 発話内容の変化 (母親)

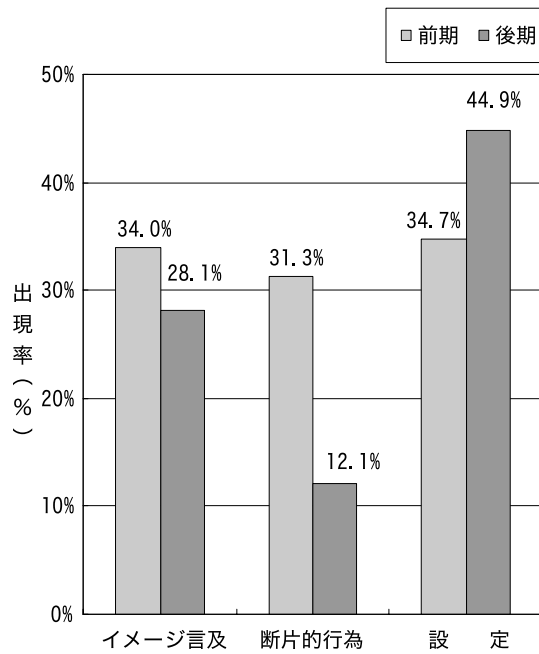


図8 発話内容の変化 (子ども)

次に子どもの発話内容は、前期では「イメージ言及」34.0%、「断片的行為」31.3%、「設定」34.7%と、いずれもほぼ同じ割合で出現していた。後期では「イメージ言及」28.1%、「断片的行為」12.1%、「設定」44.9%と、「設定」が最も高い割合であった。子どもの発話内容は前期から後期にかけて「イメージ言及」「断片的行為」は減少し、「設定」は増加していた。特に「断片的行為」が約20%と大幅に減少し、「設定」が約10%増加していることから、前期か後期にかけて場面を設定し、それに沿った発話をするようになることが伺えた。

IV. 討 論

本研究では、2歳児女兒2名の母子遊び場面について縦断的記録を行った。その記録を前期（2歳6か月まで）と後期（3歳まで）に分け母子の発話の特徴について比較検討を行った。従来の研究では母親の言語的援助が重要視されていた。本研究結果では、エピソードの開始率は母親が多く、終了率は子どもの方が多く結果であった。このことから、先行研究と同様に母親によるごっこ遊びへの導入が行われていたと思われる。しかしながら、前期であったとしても子どもによるエピソードの開始場面があり、後期になるとその割合は増加していた。また、終了率は後期になると母子間でほとんど変わらない結果となっている。さらにエピソードからの逸脱結果では、前期にわずかに子どもの逸脱率が高く、後期では母子間でほぼ同じ割合となっている。このことから、2歳代の母子相互交渉であったとしても全面的に母親の言語的援助に頼る相互交渉が展開されているわけではないと思われる。わずかではあるが子ども自身の力も発揮されており、月齢発達とともに発揮されることが高まると思われる。また、後期になると母親と同じように持続的に会話に参加することが可能となると思われる。

次に、整合性のある会話に必要な発話間関連性とテーマ関連性について検討を行った。発話間関連性では先行発話と後続発話に一致がみられるか否かを、テーマ関連性では主題と一致がみられるか否かについて分析を行った。その結果、発話間関連性では母子ともに前期から後期にかけて増加していた。また一致率は、前期は母子がともに約70%、後期は母子がともに約80%と、前期から比較的高い割合で母子が互いに相手の発話と関連した発話を用いて応答していた。特に子どもが前期から比較的高い割合で関連性のある発話を応答できることは先行研究の結果と一致するものであった。これに対し、テーマ関連性では母子ともに前期から後期にかけて増加している。しかし、母親の前期、後期の割合は発話間関連性の割合よりも10%以上下回っている。また、子どもは前期から後期にかけて約20%以上割合が高くなり、母親とほとんど同じ割合となっていた。これは、子どもは前期から後期にかけてテーマに関連する発話を応答できるような言語的な発達が背景にあることが考えられる。また母親は、子どものテーマ関連性が低い前期では母親のテーマ関連性が十分に発揮されないことによるものと思われる。後期になると母子ともにテーマ関連性が増加する理由として、母親の働きかけが変化し子どもからテーマ関連性のある発話を促しやすくなった場合と、子どもの言語発達により子どものテーマ関連性が高まったことが母親のテーマ関連性のある発話を促した場合の2つが考えられる。そこで発話内容を場面設定の特徴から、場面設定の不明確な「イメージ言及」「断片的行為」と、場面設定の明確な「設定」に分けて分析を行った。その結果、母親は前期、後期ともに「設定」が最も高く、「断片的行為」が最も低い結果であった。「イメージ言及」「断片的行為」「設定」それぞれの割合は、前期から後期にかけて若干の増減はあるものの、ほとんど変化がみられなかった。一方子どもは、前期では「イメージ言及」「断片的行為」「設定」がほぼ同じ割合であったのが、後期になると、「設定」が最も高く、次いで「イメージ言及」、そして「断片的行為」が最も低い結果となった。特に「断片的行為」は大幅に減少し、「設定」は母親とほぼ同じ割合まで増加した。発話内容からごっこ遊びへの発話特徴をみていくと、母親の発話特徴は前期と後

期でほとんど違いはなかったと思われる。これに対し、子どもは場面が設定されていない発話が減少し、設定に沿った発話が増加していることから、子どもはよりエピソード場面にあった発話特徴へと変化している。したがって、先の母親のテーマ関連性が前期では比較的低く、後期になると高くなるのは、母親の働きかけの変化というよりも、子どもの変化によるものだと考えられる。つまり、子どもが場面設定を十分にすることができないと、母親が設定した場面が維持されにくくなる。そのため新たなイメージを提案することになる。その結果テーマ整合性が低い結果となったと思われる。しかし、後期になり子どもが場面設定に沿った発話をするのが可能になると、子どもにおいても設定が維持されるようになる。その結果、母親は維持された設定をさらに展開することが可能となりテーマ関連性が後期になって上昇したと思われる。

以上のことから、2歳代の母子相互交渉では母親の援助によって遊びが展開されるだけでなく、子ども自身の言語発達も発揮されている。さらに、相互交渉においては母親が会話に必要な技術を身につけていたとしても、子どもの発達状態によっては十分に発揮されない。むしろ、子どもが言語的な発達を相互交渉中に発揮することで、母親の技術も引き出されることになる。そして、より子どもの発話を促すことへと繋がるのではないと思われる。このように会話は相互交渉の中であり、発話者それぞれの特徴と関連付けてみたときに相互交渉の意味が明らかになる。したがって今後は、幼児の言語的相互交渉の中から言語発達と関連する情報を抜き出すことで、より詳細な幼児のコミュニケーション発達の検討を行う必要があると思われる。

文 献

- Austin, J.L.(1978). *言語と行為* (坂本, 百大, 訳) 東京:大修館書店. (Austin, J.L.(1976).How to do things with words : Oxford:Oxford University Press)
- Bloom, L., Rocissano, L., & Hood, L., 1976, Adult-child discourse : Developmental interaction between information processing and linguistic knowledge. *Cognitive Psychology*, 8, 521-551.
- 深田昭三・小坂圭子. (1999) . 幼児における会話の維持 : コミュニケーション連鎖. *発達心理学研究*, 10, 220-229
- 藤崎春代・無藤隆. (1985) . 幼児の共同遊びの構造 - 積み木遊びの場合 - *教育心理学研究*, 33-41
- Garvey, C.(1977). Contingent queries. In M. Lewis, & L. Rosenblum (Eds.), *Interaction, conversation, and the development of language* (pp.63-94). New York : John Wiley & Sons.
- Garvey, G.(1987). *子どもの会話 : おしゃべりにみるこころの世界* (柏木恵子・日笠摩子, 訳) .東京 :サイエンス社. (Garvey.(1984). *Children's talk*. Cambridge : Harvard University Press)
- 冷水来生・田中淳・久慈洋子・大沢啓子・斉藤こずゑ・無藤隆. (1980) . 幼児の会話における発話行動の種類と発話長の分析, *教育心理学会第22回総会論文集*, 276-277
- 橋内武. (1999) . *ディスコース—談話の織りなす世界—*. 東京 : くろしお出版
- 秦野悦子. (2001a) . 幼児における会話の順番取りトピックの維持. *川村学園女子大学研究紀要*. 第12巻, 第1号, 川村学園女子大学, 千葉, 156-170
- Shatz, M., & O' Reilly, A. W.(1990). Conversational or communicative skill ? A reassessment of two-year-old children's behavior in miscommunication episodes. *Jornal of child Language*, 17. 131-146

- 高濱裕子. (1993) . 幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか, 発達心理学研究, 4, 51-59
- 綿巻徹. (2001) . コミュニケーションとことばの発達, 教育と医学, 49. (6), 28-26

Developmental changes of conversations between mothers and two-year-old children in pretend play situation

Noriko IIJIMA

(Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

This study investigated how mothers and their two-year-old children developed their conversation in pretend play situation. Subjects were two mothers and their two-year-old daughters. They were observed six times bimonthly. Each observation consisted of 10 minutes pretend play session. Six sessions were divided into two terms. Each term had three sessions.

Main results were as follows:

1. Though the number of utterances in pretend play session increased, the number of episodes decreases from the first term to the second term.
2. The ratio of related utterances (RU) in children was high (70.4%) in the first term.
3. The ratio of utterances which were related to the theme (Theme Related Utterance: TRU) in mother increased 55.3% to 73.3%.
4. The ratio of TRU in children increased 47.6% to 75.4%.

Key Words : 2 years old, mother and child interaction, conversation, related utterances,
theme related utterance